Bericht des Deutschen Hauses in Naruto

Ruhe（ルーエ　やすらぎ）

November　2005

13

The German House in Naruto

鳴門市ドイツ館館報　第13号

発行日　２００５年１１月２８日
発　行　鳴門市ドイツ館
編　集　館長　田　村　一　郎
〒779−0225
鳴門市大麻町桧字東山田５５−２
TEL:088 689 0099 FAX:088 689 0909
URL : http://www. city. naruto. 1g. jp/germanhouse/
e-mail : doitukan@city. naruto. 1g. jp

# 「全国フォーラム：『ドイツ兵俘虜収容所を考える』」開催

「日本におけるドイツ　2005年／6年」行事の一環として、去る10月１日に本ドイツ館で「全国フォーラム」が開かれました。元ドイツ兵俘虜収容所所在地ばかりでなく、全国各地や地元からものべ150人ほどが来られ、熱心に発表に耳を澄ませ、討議に参加してくださいました。

前半は川上三郎さん（徳島大学）の講演で、2001年にドイツで発見された徳島俘虜収容所の『徳島新報（Tokushima Anzeiger)』 の内容とその意義について話されました。

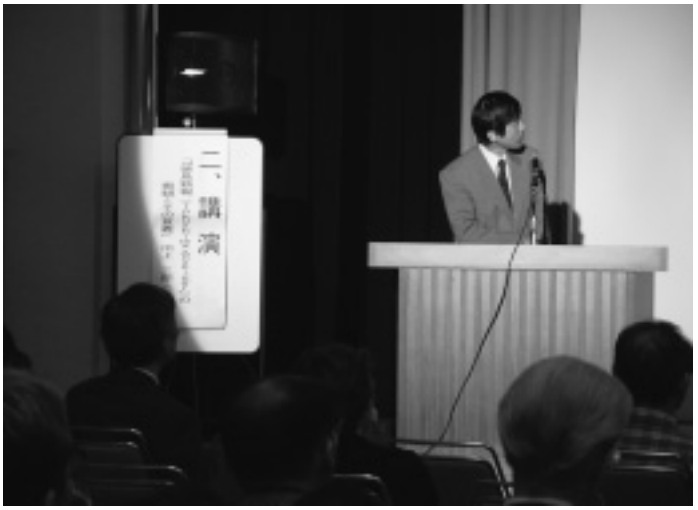
この新聞も『バラッケ』と同じく、今ではドイツでも読める人の少ない「古い筆記体」で書かれています。その現代文字化もたくさんの方々の協力で完了しましたが、この新聞はほぼ週刊の１年半分で、67号1,600ページもあります。主な内容は、戦況報告など戦争関連の記事、故国ドイツを扱ったもの、チンタオにかかわるもの、日本の紹介、収容所内外の出来事を綴ったものなどです。川上さんはこれらについて、新聞の挿絵や地図などを交えながら判りやすく解説なさいました。

後半は、青島戦当時のドイツ軍の「部隊名・階級名」をめぐる「シンポジウム」でした。これまで研究者の間での食い違いも多く、少しでも一致点を探りたいということで今回の論題が選ばれました。しかしテーマがテーマだけに原語を交えた報告や発言が多く、一般の方にはやや理解しにくかったようです。

最初の提題者の星昌幸さん（習志野市教育委員会）は、ハンス＝ヨアヒム・シュミット氏のHPなどを参考にいくつかの例を引きながら、当時の歴史事情をふまえることの大事さを強調されました。そうした観点から俘虜情報局による「日本側公定訳」を重視され、関連する「部隊名・階級名」すべてにわたる「試訳」の一覧を提供してくださいました。

２番目の提題者の瀬戸武彦さん（高知大学）は、「第３海兵大隊」と訳されることの多いⅢ．Ｓ．Ｂ．に「海軍歩兵第３大隊」など様々な訳語があること、ことに海軍所属とはされているが陸戦を主とするこの組織については、「歩兵」とする人と「海兵」とする人の間で基本的な対立があることを明示されました。

３番目の田村一郎（鳴門市ドイツ館）は、「階級名・部隊名」の訳語は、やはり現在のわれわれにとって判りやすいものでなければならないという立場から、Ⅲ．Ｓ．Ｂ．が生まれた背景や、アメリカの「海兵隊」との比較などの大事さを強調しました。ことにⅢ．Ｓ．Ｂ．の最下位の階級である　Seesoldatが、当時のドイツ側の基本文書（Friedag (Hrg.) Führer durch Heer und Flotte 1914（フリーダック編『1914年の陸・海軍への入門』）, 1993）にはなく、Gemeinerとされていることに注目、「海軍の新兵さん」というような意味の「俗称」あるいは「愛称」だったのではないかとの解釈を示しました。



徳島収容所について語る川上さん

詳細は省きますが、司会者の校條（めんじょう）善夫さん（名古屋日独協会）がまとめられたとおり、今回の論議はこれまでの研究をふまえた一里塚であり、今後の深化への一つのきっかけとなれば幸いです。より詳しくは、「『青島戦ドイツ兵俘虜収容所』研究　第３号」（2005年９月刊）を参照願います。

シンポジウム終了後各地から参加くださった方々から、それぞれの研究状況などの報告をいただきました。ご発言くださったのは、久留米の堤さん、似島の宮崎さん、丸亀の赤垣さん・小阪さん、松山の森さんなどです。

なお、当日寄せられたドイツ連邦共和国総領事カール・ヴォカレックさんの「ご挨拶」と、川上三郎さんの関連するエッセーをご紹介しておきます。両文とも長文ですので、多小縮めさせていただきました。

「シンポジウム」風景

## ご　挨　拶

ドイツ連邦共和国総領事
カール・ヴォカレック

今年は、われわれドイツ人にとりましても、日本人にとりましても特別な年です。というのもわれわれは現在、「日本におけるドイツ　2005年／6年」という、一連の催しを祝っているからです。それらを通してさらに、ドイツと日本との何十年にもわたる緊密な関係が深められ、広げられることでしょう。

第一次世界大戦の際に、日本軍がドイツ軍の守る青島要塞を攻撃し、ほぼ5,000人のドイツとオーストリア・ハンガリー兵士が、日本各地に収容されました。そしてそのうち約1,000人が、1917年から1920年の間、鳴門の板東の収容所で過ごしました。

周知のとおり各地の収容所の厳しい状況は、ドイツ兵と日本の住民が文化的に交わったり仲良く暮らすうえで、かならずしもよい土壌ではありませんでした。それだけにいっそう、たまたまある地域で心のこもった親しい交流がなされたことは喜ばしく、そうした交流が育てた一本の小さな苗が、数十年を経て、ドイツと日本との友好のしっかりした木を実らせたのです。

第一次大戦中の日本の俘虜収容所というテーマは、さまざまな議論の場を提供してくれます。例えば、収容所内の文化生活を表す展示会とか、日本におけるドイツ人の極めて私的な日常生活をうかがわせる、ある俘虜の個人的なスケッチブックなどです。いま企画されている、ドイツ兵俘虜と地域住民との友情を描く東映の映画は、公にされている素材への関心がいかに強く、それらにどのような未来への可能性が秘められているかを、はっきり示しています。

今回の催しを通じて、「ドイツ兵俘虜収容所」についての新たな知識を交換することで、専門の研究者も歴史を趣味とする方々も、これまでの研究にさらなる弾みをつけることができましょう。 このフォーラムに、ドイツと日本の交流をいっそう促進する、未来に向けての成果を期待しています。

（訳　田村一郎）

## 徳島俘虜収容所時代の松江豊寿

徳島大学　川　上　三　郎

いま映画『バルトの楽園』でさらに脚光を浴びている板東俘虜収容所長の松江豊寿は、板東に移る前の２年４ヶ月間、徳島俘虜収容所の所長をしていた。これまで、徳島での彼が俘虜たちをどのように遇していたのかはあまり知られていなかった。もちろん、板東時代と同様に寛大に扱っていただろうことは想像がつくが、ドイツ兵たちが徳島で彼をどのように見ていたかを伝える資料はほとんどない。しかし『徳島新報』の記事や日本側の資料を詳しく見直していくと、いかに思いやりを持って俘虜たちを遇していたかが浮かび上がって来る。

『徳島新報』の1915年６月発行の記事には、日本の夏の暑さに閉口した俘虜たちが、川か海で泳ぐことを望んでいたことが書

徳島収容所時代の松江一家

かれている。それも、どうやらあらかじめ準備が進んでいるらしい。ところが３週間経って、陸軍省の許可が出なかったことが明らかになり、なおさら暑さがこたえると恨めしげである。午後10時まで風呂を使ってもよいことにはなったが、とても水泳の代わりにはならず、河原に立てられるはずだったテントは、所内で日よけに使われることになったと嘆いている。

このとき、松江所長はどのような行動をとったのだろう。それを示す公文書が残っている(『欧受大日記』大正４年７月)。実は、水泳の際の危険防止と救護活動のために、４艘の船を７、８月の２ヶ月間借り上げる予算を上層部に申請していたのである。しかし陸軍省からの返答は、「運動の為に日々俘虜に遊泳を行わしむる如きは毫も其の必要を認めず」とにべもないものだった。さらに、もし事故でも起きて溺死者などが出たら、敵国政府に対する日本政府の責任問題になるとも言っている。このとき同時に、他の収容所にも俘虜の遊泳を禁ずる通達が出されており、松江所長が他に先駆けて水泳の実施を計画していたことが判る。

所長と俘虜たちのどちらの側から水泳の提案があったのかは定かでない。収容所の目の前に新町川が流れるという環境であり、子供たちが放課後その川で泳いでいるのを見ると（翌年の『徳島新報』にそうある)、暑さに苦しむ俘虜たちが水に飛び込みたくなるのは自然なことである。別の時期に出された陸軍省俘虜情報局の視察報告を読むと、収容所に当てられている公会堂（県会議事堂）の建物は風通しがよいが、俘虜の一部が住むバラックの方は狭小で、風通しも悪く不健康だったと明記されている。そういった状況と俘虜の気持ちを慮（おもんばか）り、予算を申請した松江所長は、寛大なだけでなく、思いやりのある行動の人でもあったと言うべきだろう。

ちなみに、さすがに軍部もこのような居住環境に配慮したのか、１年後には遊泳の許可が降り、めでたく新町川で泳げるようになった。ところが折悪しくコレラが流行し始め、禁足令が出て、結局１日しか泳げなかったそうである。

## 「板東風ソーセージを再現」

「全国フォーラム」に引き続いて、板東収容所で作られたと思われるソーセージの再現発表会が行われました。詳細は、作成に当たられたウインナークラブの松本さんの報告に譲りますが、1918年３月に開かれた「美術工芸展覧会」で提供された、「飾りつきの、詰め物をした子豚」の再現をはかったものです。

発表会ではまず、松本聖一さんが再現ソーセージに取り組んだ経過と実現過程について話され、続いて「食肉加工マイスター」の小林武治郎さんが、再現の苦労とその意義を強調されました。最後に木村恒男さんが製品を前にそれぞれの特色などを説明され、試食に入りました。

再現された「板東風」ソーセージ

長年の執念と習志野などからの新たな資料がマッチしての成果で、参加者は10種類からの試作品に、大いに感動しながら舌鼓（したづつみ）を打ちました。なおこのソーセージは「ドイチェスフェスト」でも売り出され、大変好評でした。

## 「板東収容所」におけるソーセージの復元をめざして

㈱ウインナークラブ　松　本　聖　一

いろいろの方から、なぜ古いソーセージの復元を考えたのかという質問を受けます。大阪から徳島の石井町のウインナークラブに移ってきたとき、「板東収容所」のことを知りました。仕事柄すぐにドイツのソーセージが思い浮かびましたが、なぜ徳島にその伝統が残っていないのか不思議でしたし、もし残っていないのなら自分で復元してみたいと考えました。

ドイツ館に問い合わせたところ、渡されたのは1918年３月に俘虜が開いた「美術工芸展覧会」のパンフレットと、船本宇太郎さんと松本清一さんが書いた「ドイツ俘虜の家畜管理と酪農の草分時代について」という小冊子だけでした。

この展覧会の資料には、出品された15種類ほどのソーセージなどの名が並んでおり、試訳も付けてもらったのですが、例えば「詰め物をした子豚、飾りがしてある」などとあるだけで、実際にどのようにすれば復元できるのかまったく判りませんでした。

ところが今年になってドイツ館から、習志野の飯田吉英『豚と食肉加工の回想』という資料が手に入ったとの連絡がありました。やっとレシピらしいものが見つかり色めきたちましたが、読んでみると判らないことだらけでした。しかしこのあたりを手がかりにしなければ復元は不可能と考え、丁寧に解読していきました。

弾みになったのは、大阪の「食肉加工マイスター」の資格を持つ小林武治郎さんと知り合ったことです。手持ちの資料をお目にかけると大変興味をもたれ、徳島にもお出でいただきました。いろいろ検討した結果、10月１日のドイツ館での「全国フォーラム」でのデビューをめざして取り組むことになりました。

小林さんも、「飾りがしてある」とはどういうことかと首をひねっておりましたが、再度ドイツに行かれた際に、修業なさった「バイエルン食肉学校」で古い文献を見つけてくれました。そこには、「飾りの付いた豚」の挿絵が載っていたのです。

最終段階に入って、習志野収容所時代に使われていたソーセージ作りの仕様書の原書が復刻されるとの情報が入りました。1902年に刊行された„Die internationale Wurst-und Fleischwaren-Fabrikation“（『国際ソーセージ・食肉製品工程』）で、習志野にいたカール・ヤーンがもっていたものです。当時のソーセージ作りの基本を記したもので、当然板東の職人もこれに従っていたと思われます。復刻は麻布大学の坂田亮一教授の手によるものですが、ここにははっきりした「飾りの付いた豚」やその頭の挿絵が載っています。これで必要な情報は、ほぼすべて揃いました。

製造に当たって、道具も当時と同じものを使いたいと思いました。その頃はほとんど手作業で、すべてが粗挽きタイプでした。「燻煙」も機械化されたスモークハウスではなく、直下型のを使っておりました。幸い昨年、「国の登録文化財」に指定された「船本牧舎」に、当時のものが残っておりました。貴重な設備を貸してくださった船本さんに感謝しつつ、８時間かけて作業を終えました。

このようにたくさんの方のご協力を得て、復元が成功しました。今後は鳴門市や徳島県の観光資源の一つとして、活かしていければと思っています。ありがとうございました。

「ソーセージ再現発表会」から

## H.－J．シュミットさん来鳴

10月30日「ドイチェスフェスト」の日に、ドイツで第一次大戦時の「ドイツ兵俘虜」の研究者として知られている、ハンス＝ヨアヒム・シュミットさんが鳴門に来られました。ザールラント州の教育関係のお仕事のかたわら歴史研究に励まれ、研究成果をHPに公開、俘虜の個人情報などその詳細なデータは、日本の研究者にとっても大いに助けとなっております。

たまたま移り住んだ家の屋根裏から、板東で過ごした元俘虜のアンドレアス・マイレンダーの資料をみつけたのがきっかけで、日本での俘虜の研究に入られたそうです。今回の来日は、鳴門出身の篠田和絵さん夫妻の招きによるものですが、その出会いも数奇なものです。

パーティーでのシュミット夫妻と篠田夫妻

篠田さんのおじいさんは、似島におりましたドイツ兵で、第一次大戦前に青島で篠田さんのおばあさんと出会い、２人の娘を授かりました。ところが日本での５年の俘虜生活の後、どうしたことか一人でドイツに帰り、音信が途絶えました。

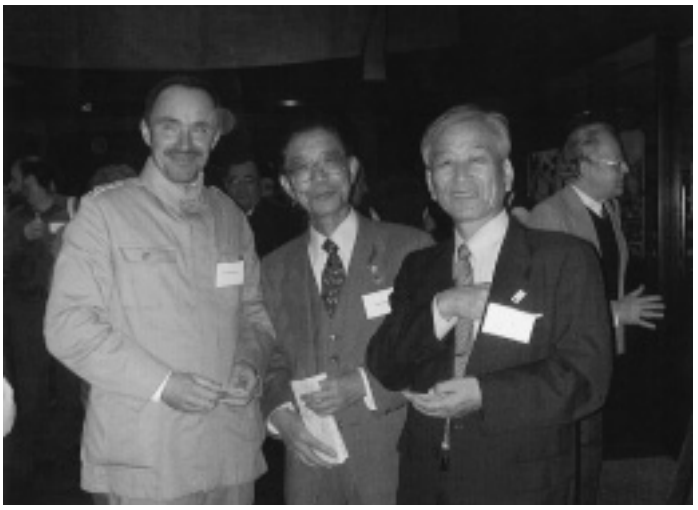
あるきっかけから祖父のことを知った篠田さんは、習志野の星さんなどの協力でその人がヴィクトル・ヴァルツアーであることを突き止め、お墓を探しにドイツに渡ります。この困難な作業を、全面的に支援してくれたのがシュミットさん夫妻でした。その詳細は、『「青島戦ドイツ兵俘虜収容所」研究　第２号』の篠田さんの文章をお読みください。

シュミットさん夫妻は慌しい日程にもかかわらず、夕食会にもご出席くださり、市長をはじめ市の関係者やドイツ館史料研究会のメンバーなどと懇談しました。シュミットさんは、鳴門市が重視している元俘虜の子孫についての情報にも詳しく、そうした面からの交流も期待されます。われわれ研究にたずさわる者は、これを機会にいっそう交流を深め、大きな成果を生み出してゆきたいとの思いを新たにしました。

## その他の主な行事

2005年７月末に出ました前号以降の主な行事を、簡単なコメントをつけて紹介しておきます。

- ８月13・14日　ドイツビール・ワイン祭り
- ９月28日　ドレスデン吹奏楽団演奏会
- 10月８・９日　「あるとき、夢の国で　.....」木版画ワークショップ：ドイツから来られたザルデンさんの指導によるもので、作品展も開かれました。
- 10月16日　『バルトの楽園』ロケセット完成。記念式典が行われました。
- 10月23日　「ルートヴィッヒ２世とその王宮、そしてワーグナーと自然」：ドイツの美術史家シュパンゲンベルクさんによるスライド講演会
- 10月26日　OAG（ドイツ東洋文化研究協会）展示会「日本におけるドイツ人捕虜　1914―1920年」および「DIJドイツ・日本研究所の板東コレクション・バーチャル展覧会」共同開会式：「バーチャル展示会」は、〈http://bando.dijtokyo.org〉で見ることができます。



映画エキストラ予定者と市長、ドイツ館長（OAGにて）

・10月30日　「ドイチェスフェスト in なると」：映画のロケセットと「再現ソーセージ」の人気で、多数の人々が来場しました。
「特別企画展　ヘルマン・ハンゼンと『徳島オーケストラ』－『徳島収容所』を中心に」開幕：来年の１月15日まで開催

・11月３－６日　DAAD（ドイツ学術交流会）鳴門ゼミナール：日本の大学で教えておられるドイツ人など、約30名が参加

・11月３日　「松江豊寿顕彰碑」（徳島市郷土文化会館西側）除幕式：松江所長のお孫さん（行彦、美枝子、正春の３氏）もお出でになりました。

・11月５日　中四国独文学会（愛媛大学）で、シンポジウム「第一次大戦時の中四国におけるドイツ兵俘虜収容所」を開催

・11月10日　『バルトの楽園』撮影開始

「顕彰碑」除幕式での松江所長関係者

『「青島戦ドイツ兵俘虜収容所」研究　第3号』

2005年9月　刊　行

誌代 500円　　送料 290円

## ドイツ館の展示照明について

夏ごろに大阪から来られた方から、「感想」を通じて本館の展示照明についてのご注意をいただきました。本館では切手やプログラムなど現物を展示してありますが、ほとんどの博物館では光線による劣化を防ぐためレプリカに変えており、配慮が足りないのではとのご指摘でした。その後高松のフィラテリスト（切手等の収集家）の方から、直接同じようなご注意をいただきました。お心づかいに感謝しつつ、直接展示を手がけてきました副館長に答えていただきました。

### 展示照明についてのご指摘についてのお答え

ドイツ館副館長　中　野　正　司

ドイツ館の常設展示室につきましては、外光が直接入らないように工夫され、照明につきましても、美術館用の紫外線をカットした特殊な蛍光灯や電球、スポットライト等を使用しています。このように、展示史料に退色等の劣化が進まないように極力配慮はしております。

近年史料保存のためレプリカでの展示に切り替えているところが増えておりますが、本物を見学に来られるお客様に納得いただけるような、迫力ある精緻なレプリカを作成するとなりますと、まだまだ多額の経費と高度な技術が必要です。国内ではそのようなレプリカを作成している博物館は少なく、残念ですが本館もまだそこまでできる状態にはありません。このような事情ですので、不備ではありますが現在の配慮でご了解願えればと存じます。

### 編集後記

「ドイツ年」のせいもあり、たくさんの行事が重なりてんてこ舞いでした。今回は「全国フォーラム」と「ソーセージ再現発表会」を中心にしましたが、ほかにもご紹介しなければならないことも多く、次回以降を期したいと思っています。ロケセットもきっちり完成し、いよいよ11月10日から『バルトの楽園』の撮影も始まりました。その紹介も、次回にはさせていただきます。（田村）